

## 一枚摺

——手銭家所蔵資料紹介(五)——

佐々木 杏 里

(公益財団法人手銭記念館学芸員)

### 摘 要

出雲市大社町手銭家に伝来する文芸資料の中から、一枚摺と版木を紹介する。この資料は、大社における文芸活動の実態を見る上で、多くの示唆を与えてくれる貴重な資料である。

キーワード…一枚摺、和歌、俳諧、杵築文学、手銭記念館

### はじめに

狂歌や俳諧などに絵を添え一枚の紙に摺られたものを、「一枚摺」という。一枚摺は、元禄期頃には既に作られていたが、寛政期を経て文化文政期以降、大流行した。

売り物としてではなく、仲間内で配るために作られたものが多く、(歳旦、春興、秋興、三節(歳旦吟、歳暮吟、春興吟を一組とした物)といった時候をテーマにしたもの、追善、祝賀、披露等々、多種多様な「一枚摺」がある。

### 手銭家に伝来する「一枚摺」

現在までに、約40点の「一枚摺」と3枚の版木を確認している。年代不明な資料もあるが、ほとんどは、文化年間(手銭家五代有秀時代)以降、摺られたものと考えられる。

美濃派の俳諧が主流だった三刀屋、木次からの一枚摺が複数伝来しているが、昨年紹介した直筆一枚摺にもあった中西喜朝の号が見られ、やはり、かなり親しい関係であったと推測できる。

三刀屋、木次の俳人らとの交流の背景については、今後調べていか

なければならぬが、文芸だけでなく、当時の社会、経済など様々な分野を含めて見ていく必要があると考える。

今回紹介する3枚の版木のうち、46(No. T96312)は、40(No. T597)の上段部分の版木である。このことから、T597は、地元で摺られた(或いは、手銭家七代・有頼自身が摺った)一枚摺なのではないかと考えるようになった。

また、32(No. T541)には大根が描かれ、「画 素川」とあるが、この「素川」は、複数の資料に見られる俳号で、大社の住人と思われる。

そんな中、複数枚見つかっている27(No. T534)の全ての裏面に、「杵築起友刀」という朱印が押されていることがわかった。

27(No. T534)、45(No. T96311)など、複数の資料に「起友」の句が載っている。「起友」も「素川」同様、大社に住み、手銭家の人々と俳諧を共にたしなんでいた人物だと考えて構わないだろう。

つまり、幕末の大社では、版木から手がけた大社産の一枚摺が摺られていた可能性が高い。

「起友」や「素川」がどういう人物だったのか、出版事業といえるほどの規模だったのかどうかなど、まだ不明な事はかりで、今後より詳しく調べていくべき課題である。

江戸時代、地方で行われていた文芸活動について、今後、新たな知見が得られることを期待している。

#### 〈凡例〉

概ね所蔵資料番号の順とし、『手銭家所蔵資料紹介(四)』(二〇二〇)で紹介した直筆一枚物に続けて通し番号をつけた。

通し番号に続けて、分類(和歌、俳諧などの別)、所蔵資料番号(No.)、資料寸法、資料情報(袋、など)、作者本名(地域)、製作年、翻刻の順に記した。

翻刻にあたり、私に句読点を補い改行も適宜改めた。概ね通行の字体にあらためたが、一部原本の表記を残した。

難読の箇所は□で示し、推定できる文字は「」で囲んだ。落款は〈〉で囲み、判読できた物については記した。

参考のため、原本の図版数点を最後に示した。

#### 〈翻刻〉

26 俳諧

No. T53311

寸法 縦19・3cm 横13・5cm。

作者 日々庵浦安

文政九年(1826)

#### 〈丙戌〉

月花も時としよりにて明の春

世のはりを見て居るとしの生海鼠哉

まつやなぎ日々のうらゝは誰の為ぞ

すか浦のほとりなる蓑笠の翁

〈日々菴〉〈浦安〉

27 俳諧

No. T534

寸法 縦17・8cm 横24・5cm。

裏に〔杵築起友刀〕と朱印

春興

雲州三刀屋連中

きしなくや朝川落す竹筏

鶯光

踏つけた島の直るやはるの雨

有十

のほる日も入日も受る野鳥様かな

起友

○

な、草や村の子供に見て貰ひ

さの女

うしの子の淵にあふなき董かな

南逸

山吹や水うちけふる瀧の筋

南雅

二月十日はかり、社友二三子低庇に来たりて、けふは殊にのとか

なれば、山野河海の差別なく足にまかせてものせむと、おのく

わうはむなとてうして、頻りにせむるに、花鳥の芳節よそにしか

たく、とかくのいらへもなく、こゝろをおなしうす

眼をやればめをやるかたのかすみかな

南谷

28 俳諧

No. T536

寸法 縦17・5cm 横45・4cm。

雲州三刀屋連中

文政十三年(1830)

春興

喜朝

〔文〕桂

引汐の砂浜匂ふ春日かな

松花

ゆるやかな春見る朝の柳かな

斧山

行雁や海原広き空の浪

知雀

糠漬に薫りの付や春の雨

更蚊

足洗ふ顔をなてたる柳かな

朝柳

たる、柳風あれかしと思ひけり

松居

梅が香にさはらぬ程や春の雪

女

とも

鶯のこゑのふとりや竹の瘦

十句表

朧月花に見すかす鳥かな

樗の戸

白羽

涼解や筆うつくしき水の色

喜朝

啄み遊ぶ鶴も若草

交桂

手まくらに年賀の酔をくつろきて

松花

所望の色紙書なくりけり

更蚊

梢をもならさぬけふの朝けしき

松居

須磨はあはれの多き名所

知雀

連てのいて今は人目をつゝむうさ

とも

夢に二度まで母様の顔

斧山

澄くくと長夜の月の冴わたり

朝柳

祭りの宮居翁はじまる

文通

雪解や古簀なくす山法師

カモ

麻嶺

水は水の色に流れて柳かな

亀嵩

桃破

文政十三寅年

一枚摺―手銭家所蔵資料紹介(五)―(佐々木杏里)

九十九髪やさしき業の飼蛭哉  
水見へて足もとくらき蛙かな  
灯燈はいそぎの用の朧月

、 汀柳  
松江 春水  
吉田 得々庵

御所蟹の外に照らる、摘菜哉  
沢山に持たるうへの接木かな  
ひらきよき昼の障子や冬の梅

深風老砂  
長門萩 寿二  
五竹庵  
京橋二刀

29 俳諧

No. T537

寸法 縦17・6cm 横47・2cm

雲州三刀屋町郷連中

天保三年(1832)

天保三辰とし

雲州三刀屋町郷連中

春興

世をのかれたるにはあらねと、人に野□をいはぬ低□なれば  
捨ぬ身も風の柳のこゝろ哉

喜朝

虚に遊び実にかれつ花に蝶  
谷川もぬるむ日和や梅の花  
若草やまたらに青む長堤  
破さます顔にふれく春小雨

交桂改蜂の舎  
直路  
松花  
女 とも  
知雀

放れたりそふたり朝の柳哉

更蚊

野を焼し煙や岸の夕くもり

松居

四五日に野の青みけり春の雨

童谷

うくひすや障子にうつる日の匂ひ

朝柳

昇る日に簾かけたる柳かな

喜斎

花代や顔に覚の若菜売

今市 不数

蛙啼や夜は静りて小糠雨

日ノホリ 亀川

旅の日を夢に遊ふや春の雨

、 花川

水の月こそくる岸の柳哉

熊谷 一夏

春雨や枕に遠き朝雫

、 花朝

よの鳥もふみちらしけり梅の花

、 枝遊

鶯のこゑに障子をやふりけり

、 案山子

男達になりて二日の灸哉

、 丈風

若草や宿夕の雨に三四五歩

、 遊之

鶯や暖さ覚る二三日

、 童洲

引汐につれて入日の長閑也

、 樗の戸 白羽

○ 春雨や鐘楼の僧は高軒

七十翁 墨後

短歌行

漸やくに垣結ふ日あり梅の花

逸甫

纏れほとける鶯の舌

喜朝

新参も硝子見ればほ、笑みて

墨後

老のせつきにはつす暖簾

案山子

ウ 千金は尾上の月の放れ際

直路

うつむく早稲に露競ふ也

左迂の身にわりなくも思ひそめ

片敷く袖の須磨のぬれ衣

照りもをす曇りも晴す空の色

宿かへの荷にませかえす暮

花よりも餅に座頭の腹鼓

こほす汲み茶に膝の陽炎

二ッ

入佛の間近になりて事多き

寛の水の六かしふ來る

物知りと誉らるゝ身の肌に汗

田植えの後も済ぬ山論

ひた／＼と寄せてはかへるさくら波

嫁入り前も遊ぶふあどなさ

月の秋何れ劣らぬ萩薄

祭り過ても巻ぬ絵簾

二ウ

御師匠は兵書に受ておとけこと

狸の化する腔のひろかる

花の雲次第にふへる比となり

哥に治るわか国の春

右

文通

啼かて走る猫や思のはかられす

寐通しに夜の明てあり春の雨

松花

丈風

不数

喜齋

一夏

更蚊

松居

亀川

花川

枝遊

花朝

竜測

遊之

知雀

朝柳

とも

竜谷

白羽

筆

吉田 得々庵

亀嵩 桃破

春雨や小田に簀着た人のさま

春風や山にさはらひ海に蛸

八巾かけて悪しと引や鬼瓦

春の野の緑めはしめは柳哉

○

雲低く湖高しおほろ月

日和そと雲雀から夜の明にけり

みの行脚

素元坊  
春峨

30 俳諧

No. T539

寸法 縦19・4 cm

横25・7 cm

はるならて人にあかれぬ小てふ哉

谷かけや荊に見出す梅二輪

輪かさりや岩の清水は運へらむ

焰をけせは障子に初日明り哉

呼水の嵩む日ころや初かすみ

いさゝかな家て名のある柳かな

鶯やおもひかけなき市の店

枝川も橋かけてあるむ月かな

月に香のそふて来にけり梅の花

鳥井まてなたれる山の霞かな

初鶴やはや鳴たつる空の家

輪かさりや今としもふえし掛□

朧夜やひとりの鶯のにきはしき

汀柳

春水

福寿庵

カモ 詠帰庵

素元坊

春峨

百凡

梅屋

可良

大市

可捷

〔電〕戸

砂墨

芳村

可由

洗耳

微白

可居

可居

黙居

ふ遠慮な声をさせけりうめもらひ  
次呆なとすゑたきうめの若木かな

文通

梧堂  
木父

鶯や山ふところの声こもり

出雲

安海

子の春

31 俳諧

No. T540

寸法 縦21.7cm 横29.6cm

天保九年(1838)か

真直に通れぬ道や梅の花

鳳口

菴建るほと地の地もあり啼蛙

乙人

藁葺も疎に梅も疎かな

椿戸

あら海へ背向家やうめのはな

蘭一

絵に書たやうに引けり小田の鶴

月砂

鶯の啼て居る間や子の行義

北坡

ひと声と地に響けり春の鳥

亀六

八巾あけに草鞋はいたる丁稚哉

春升

朝風の来るや柳とうめの間

竹老

虚無僧を呼込かどや梅の花

六村

か、へたるさまや鍵家の梅の花

安海改

千金の春を眠かる若衆かな

柏處

今聞た聲や慥にはつ蛙

有芳

朝鷹の動きもやらぬかすみかな

薄月

隴月山の小兀にむかひけり

初はなや鳥の立のも耳にたつ

蝶々のむれる畑の自慢かな

灸すへた日の余りにて接木哉

むら起に日のさす處や梅のはな

水ぬるむあたりひ、くや杭の音

松のうち墨のゆかみを直しけり

おもふ因に鶯敷を離れたり

しほらしき薄紅梅や花の薬

黄昏や二日つゝいてはつ蛙

戌の春

窓一改

月村

さ乃

於石

双引

□丸

青左

風居

鸞二

蒼虬

北屋

32 俳諧

No. T541

寸法 縦19.5cm 横54cm

清地連

文政十三年(1830)

庚寅 清地連 集書春之屋(採書)

青物

蓬萊の松やはつ日のいくめぐり

若水や井筒に匂ふほしの梅

はつかすみ先は八重垣のひとへかな

しめひくや千尋の春の事はしめ

いせ海老のあかねさしそふはつ日かな

文麻呂

一止

撫玉

龜友

巴風

賣初や口紅かはく日のうらゝ、  
つく羽根のすくにたちけり日のはしめ  
すゑひろきはつ日や不二のかけ扇  
榎うくひすみないちはやき閑雅かな

春興

素川画

花白しゆたのたゆたのかもめ哉  
かすむ野やなに、砕ける鳥の聲  
風のかや川邊に并ふ茶摘うた  
柳ふく日なり笥のゆるむおと  
白魚になるもの雪とおもふかな  
春風やこころにゆるゝ山のかね  
ほのくくと人丸桜しらみけり  
見るものゝみなおほろ也月の雨  
春たつと聞てひらくや梅の道  
楳かゝに夜をなやまるゝ小雨かな  
そよとふく柳も春の動きかな  
乗物のうちまで霞むひろ野哉  
さしなくや隣もかすむはなれ菴  
香をぬすむ風も来ぬ也梅の月

○

毎日の人に肥たり春の山  
琴の音に添ふて吹也梅の風  
人か人呼やかすみのおく山家  
真直に日和の居る柳かな

時習  
鬼友  
竹水  
安海

素號

野塘

枳鹿

椿戸

田柳

秋丸

素英

巨流

加録

谷水

竹子

寸志

青木

素川

画僮

画雲

鬼雄

鼠輩

華鳥と共に韶景を惜む  
花としくわれは瘦たり九折  
もろこしのよしのや行衛春かすみ

〔日々庵〕〔真菅翁〕

33 俳諧

No. T570

寸法 縦12・6cm 横25・3cm

みなさけて戻るてもなしつくくし  
柳ふくあまりを川のうねりかな  
門松の下やあられを掃残し  
眼にたるみつくと鳴き出す蛙かな  
ぬるむ日や橋杭に立水のあわ  
山吹やむかし長者の屋敷あと  
あわ雪も花かと斗り柳かな  
藪入に風呂も馳走や親心  
立結し障子のうちも花の春  
鶏は屋根へそれけり水祝ひ  
手に持た箸まで白し梅の花  
若草の箒にもるゝみとりかな  
正月の空にしたしき小松かな  
花を待人のよく見る曆かな  
正月に成て寒さをいとひけり  
風あけて見付出しけり昼の月

タキ 馬得

タキ 月清

タキ 馬州

タキ 有軻

ニタ 草々

木次 如雪

大ヶ谷 長五

木次 春光

入南 無足

キツキ 楮岳

ヤノ 柳水

アラキ 呉山

、 如仙

、 梧翠

、 可性

、 曾成

日々庵

楸初の七五三にも泥の雫哉

若草や藪をぬけ出て長堤

やふ入を親も見違ふ姿かな

菜の花や沢山すきて目もとめす

右 未の春

梅里

白砂

松久

凡和

34 俳諧

No. T572

寸法 縦19cm 横16.5cm

作者 白澤蘭連

袋 「玉の春」

黄昏や人に見せたき桃のはな

四五日は秋も来てみる接木かな

めでらるる筈よ名たゝるさくら鯛

見る事の多い旅路を揚ひはり

さし鳴や笑ひをふくむ山の裾

あた道も踏や日永のものらしき

蛙なく夜や四五人のはなし声

雨晴の旅日受のひとり哉

戌の春 白澤蘭連

風居

有鞆

さの子

有樹

有水

千海

六村

安秀

酉歳旦

また此ころ外になし今朝の春

申の冬は我が宗にありて稀なる

節式ことなくなしをへしを祝ひて

つゝかなう聞てめてたし除夜のかね

梅のみに二日の月のまたれけり

右

稻株はよき足代や根せりつみ

風居

千海

36 俳諧

No. T574

寸法 縦12.9cm 横12.8cm

作者 加藤梅年

御降のやしなひ初る草木かな

こんつよい夕鶯や日和旬

入舟や沖の霞もついて来る

37 俳諧

No. T575

寸法 縦18.7cm 横25.3cm

袋 「雪月」

打水の上や秋たつ日のあたる

かたよりて月はせてある山家かな

曲川

高洲

35 俳諧

No. T573

寸法 縦12.7cm 横15.1cm

袋 「三節」

朝顔の花より明て庭涼し

蘭の香や扇たゝめは又匂ふ

山下や菊家の朝も柿紅葉

野やしきをもちて月見の□かな

静さや秋のゆふへもあるかうへ

朝月の濃白露のひかりかな

鹿ひとつ出たりいさよふ木の間より

調鴛やとても月にはよき木立

川なりに霧のなかるゝ月夜かな

鶴栄

野城

三外

亀水

五朝

貞路

磬中

丹柯

潮水

38 和歌・俳諧

No. T576

寸法 縦19・1cm 横25・7cm

作者 手銭さの子 安秀

朝けたく朝のけふりもおのつからかすみと見てそ春は来にけり  
何くれといとなむわきにくれ竹のひと夜のとしとなりけるかな  
間なく来てなげや英鳥我そのに梅をうゑしはことしのみかは

さの子

松のうち長いやうても暮やすき

落るのもきほひめきたり年の市

長き日に成ても多し野の仕事

安秀

39 狂歌

No. T577

一枚摺―手銭家所蔵資料紹介(五)―(佐々木杏里)

寸法 縦15・3cm 横20cm

作者 津守日由留

文久二(1862)

さらほひし老の身なからもくさける筆ころみむいぬのはつ春  
世の中はおあしのあるもないもみなすかり合ひにて越す年の坂

春興

□前は乳母に化かして箱入の娘引出す岡のわらひ手

津守日由留

40 和歌・俳諧

No. T597

寸法 縦19・5cm 横25・5cm

作者 手銭有頼

〔未春〕

歳暮

けふといひ明日と流るゝ早瀬川浪のひまなくくるゝ年哉

元日立春

あら玉の年の始に降るゆきはめくれぬ間にも消わたるなり

春興

高砂の松たくられるしら雲は霞める花と成ぬへきかな

あすを待空ものくし年仕舞

ふり分てうくひすもはやほそ音哉

あたに日を暮せは寒きさくらかな

有軀

〈手銭〉〈有芳〉

41 俳諧

No. T757

寸法 縦35・5cm 横49・3cm

一里の水別動く柳哉  
梅の風庵の硯に渡り亀  
入口は柳を廻る小家哉  
長閑さやみな乗程の蟹小舟  
灯の消へて貝鳴く船や朧月  
松直す空に三日月見初けり  
春駒や〈白+美〉餅貫ふ片山家  
春の氣を握て延る蕨かな  
青海苔や和水八重の垣めぐり  
松風の耳を蛙にとらせけり  
書のいとま五歩に梅見る月夜哉

峨庵 雪暁 霜暁 如暁 李暁 樗暁 其暁 東暁 佳庵 時雨庵 松風亭 松風亭 松風亭

42 俳諧

No. T785

寸法 縦22cm 横25・3cm

〈毫瑞描米／萬里江山〉  
春風や二階かちなる客の声

素竹

沢山にしら紙遣ふ花見かな

松明の手元さかるや煤の道

濡の泥干るまで見るや鳶紙

風のある日は猶花の噂かな

温泉の中で何ふ雉子の高音かな

筆染て提て鶯□に亀

雇はれて気のはる花の料理かな

かたまらぬたけは有也春の雪

長閑さに脱捨て、あるわらしかな

家内して余所の燕を追にけり

最安けに都見に出る春日哉

堀たせは初ものなる川?哉

朝風や楳と柳の間から

つ「ら」なつて正月をする船人かな

胴よくに投出されけり猫の恋

文通

掃うちは持て有けり福寿草

のみ習ふ烟草に酔ふや松の内

43 俳諧

No. T851

寸法 縦19・4cm 横16・8cm

袋 「玉函春」

暖たかをふくむて咲ぬ福寿草

馬州

氷帯

海朝

甫以

吞竜

龍蟠

竹二

弄月

馬得

吟龍

桃水

みき

待月

柴水

夜分

よし雄

一肖

蒼虬

萬歳の秘曲顔する扇かな

面白き夢は□かし古こよみ

新敷の畳の上や餅むしろ

我春のあまりを雉子のほろ、かな

梅日枝に月のもり込夕辺かな

○

峯と江のほかは見えねと初からず

未乃春

春調

猪岳

露文

凡和

月清

有節

44 俳諧

No. T853

寸法 縦19・5cm 横25・6cm

作者 藤間月清

袋 「春興」

鶯の風のうしろに高音哉

人にさすまては間のあり初日影

張ふしの松に響くや謡初

冴還いろにも出たる朝日哉

初夢の訳け言さして去にけり

門松に千代も吹せん家の風

猿曳のあてふして行山家かな

禮に笏さして捌きや事始

揉払て打居家の焚火かな

行年やひとつ減たる杖のふし

芹舎

有節

六村

凡和

馬得

春調

馬州

人呂

可中

英之

若竹や喀ひきのたつ薄みとり

鶯や机のうへにねの休む

籠を出し庵□ぬれは梅の花

○

暮遅き日をおもひけり三ヶ日

囀や野山にのこる夕あかり

涼山から薪運ぶや年の暮

申の春

皎々園 月清（月清）

楮岳

露文

露岳

45 俳諧版木

No. T963-1

寸法 縦14・3cm 横19・3cm

作者 白澤園連

麦の画もまじる河辺や郭公

おひわけや駕籠からおりてほと、きす

山かけやかせもそ、ろにほととぎす

ほととぎすそらの桂は汝か槽かや

練舟のみなすて、ありほととぎす

かくれなき声にかくれて郭公

盛なほす笥のうへやほととぎす

ほととぎすなくや雲にもおもてあり

夕東風の帆にきく瀬いやほととぎす

更るとはおもはぬ夜なりほととぎす

〔鶺鴒〕川

哥迹

琴竹

茂竹

安秀

有水

有喜

有谷

有英

我省

くはゝるはおのか五月のほととぎす

植「資」

よのうさをこちれてくれし郭公

起友

不如帰あやめせ道の朝あらし

有柳

ほととぎす草鞋なげ込雲の中

寿水

みかへれは長い坂なりほととぎす

雲嵐

ほととぎすたれおこす間もなかりけり

くら女

□ちかしといとふ住居やほととぎす

みき女

声ほとは華にわたへてほととぎす

ふみ女

花ほしを見出す膚なり郭公

たい女

ほととぎす雫もたらむほし月夜

さの女

鮎ふとる下市村やほととぎす

六村

雨かせを声の序にして郭公

凡和

ほととぎすとふゆそらにも九折

千海

おとなしによせる浪ありほととぎす

有軻

巳夏

白澤園連中

46 和歌版本

No. T96312

寸法 縦7.9cm 横15.9cm

作者 手銭有軻

40 (T597) 上段部分

歳暮

けふといひ明日と流るゝ早瀬川浪のひまなくくるゝ年哉

元日立春

あら玉の年の始に降るゆきはめくれぬ間にも消わたるなり

春興

高砂の松たぐられるしら雲は霞める花と成ぬへきかな

47 俳諧版本

No. T96313

寸法 縦14.0cm 横12.2cm

作者 手銭有秀

文化十(1814)

文化十酉

聖節 うき花の春面白と申さはや

申年尾 雹に寝ぬ友ありとしの山からす

春興 しら梅やほくくはまる岸の麦

うす月菴

(付記)

本稿作成にあたっては、立正大学 伊藤善隆氏に多大なご助力、ご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の研究」(二〇一六～二〇一八年度、研究代表者・野本瑠美)、同「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」(二〇一九～二〇二一年度、研究代表者・田中則雄)による研究成果の一部である。







一枚摺—手銭家所蔵資料紹介(五)—(佐々木杏里)

# “Ichimaizuri” — reprint and introduction ; Documents of Tezen Family Archives (5) —

SASAKI Anri  
(Tezen Museum curator)

## [Abstract]

To reprint and introduce “Ichimaizuri”. This material is a valuable resource that gives many suggestions when looking at the actual state of literary activities at Taisha.

Keywords: Ichimaizuri, haikai, Waka, Kizuki-Bungaku, Tezen Museum